

〈教科書「地方議員」リレートーク〉

■「歴史認識」が首長選挙の争点として
定着することを願ふ

杉並区議会議員（無所属）

田中 ゆうたろう



杉並区といへば、平成十七年・同二十一年、山田宏元区長の時代に、扶桑社（当時）の歴史教科書を採用した快挙で知られる。二十三区では初めて、他の公立校でも同社の教科書が採択された実績は稀だった。ここに改めて、今は鬼籍に入られた大蔵雄之助氏、宮坂公夫氏ら、当時の教育委員の識見、また任命した山田氏の功績に深甚の敬意を表したい。

だが、それも同二十三年の教科書採択で終はつてしまふ。前年辞職した山田氏に替はり、新しく区長の座に就いた田中良氏（元民主党）に付度し変節した教育長や、田中氏が新たに任命した教育委員らによつて、帝国書院の歴史教科書が選ばれてしまった。その流れは、令和四年の区長選挙で田中氏が落選し、立憲・共産系の岸本聡子氏に交替した今も続く。

杉並区の自民党を強かに手懐けてゐた田中氏は、保守系と見なされることもあるが、右の事実を見ても全くの誤解であることが察せられやう。国政選挙はもとより、各首長選挙において「歴史認識」が一つの争点として定着することを願つて止まない。

そのために、私も志を同じくする同僚議員と力を合はせ、引き続き教科書採択について粘り強く区議会を取り上げ、有権者の間にさうした機運が醸成されるやう、これからも最大限に力を尽くして行く所存である。

■教育の本質とは

新城市議会議員

カークランド 陽子



市議会議員になるまでは、娘のために何がベストかと、手探りで子育てをしてきましたが、令和3年に議員になってからは、児童施設の視察や、不登校のお子さんを持つお母さん、また教育委員会の方のお話を伺う機会を得て、そこからいわゆる「普通」の家庭の子育ての視点とは違った見方というものを学びました。そして学校教育のあるべき姿、教育の本質についてを考えるようになりました。

かつてイギリスに住んでいた経験から、昨今の行きすぎた男女平等の流れやLGBTQの過剰な推進、核家族化による孤独な子育て、そして行きすぎた個人主義などには疑問を持っており、教育を考えたいくうちに、現在の課題の多くは、海外から押し付けられたこれらの価値観に起因しているのではないかとの思いに至りました。

その視点で改めて教育基本法を見ると、第1条(教育の目的)には「教育は、人格の完成をめざし、平和的な国家及び社会の形成者として、真理と正義を愛し、個人の価値をたつとび、勤労と責任を重んじ、自主的精神に充ちた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない。」と、とても大切な教育の本質が描かれていることに気が付きます。

それぞれの国にはそれぞれの気候や風土や民族性に合ったやり方があり、すべての国で一律同じやり方を押し進めている現在の国連主導の流れは、見直すときが来ているのではないのでしょうか。